

国際協力における歴史都市の保全再生の展開

- シリア国ダマスカスの事例 -

筑波大学大学院システム情報工学研究科

○ 松原 康介*

キーワード：ダマスカス、都市保全、番匠谷堯二、JICA、住民参加

1. はじめに

歴史都市は住民により長い時間をかけて形成された、地域に固有の文化の一つの頭れである。先進国においては、大規模開発に負わない地域活性策として、または景観保全や観光振興といった視点から歴史都市の保全再生が試みられている。途上国においても重要な歴史都市は多く存在するが、方法論においても体制面においても十分な対策がなされていない。そこで頼みとなるのが広義の国際協力であると考えられるが、わが国では官ベースで学識経験者中心の記念的遺産の修復事業こそ実施されるものの、現実に住民が生活している都市の保全再生は、依然としてマイナー分野にとどまっている。

本発表では、わが国の継続的な協力により都市保全が試みられてきたシリア国ダマスカスの稀少な事例を概略的に紹介し、国際協力に基づく都市保全には、どのような課題があり、それを乗り越えた先にどのような展望が拓けるのかを検討・報告したい。

ダマスカスは様々な文化の影響下で成熟した。ヘレニズム時代のグリッド街路は、イスラーム時代に迷路型街路と合体した(図1)。ローマ教会はウマイヤド・モスクに改修された。仏領時代(1920-46)に入ると、公衆衛生・過密化対策の下に旧市街を開削し道路を建設するオスマン型の計画が推進され、歴史的空間は徐々に喪失されていった。



図1:グリッド街路と迷路型街路の複合

2. 番匠谷堯二の業績と日本の協力

1968年、国連開発計画の専門家としてダマスカスの都市計画を策定した番匠谷堯二(ばんしょうや・ぎょうじ)は、東京工業大学の清家清に伝統と近代の調和を学んだ日本人であった。彼が同僚のミシェル・エコシャールとともに目指したのは保全と近代化の両立であった。両者の連名論文には、「どうするのか?われわれはこの商業センター(旧市街)を放置して、外側の近代市街地に新しいものを作り直せばいいのだろうか。そんなことをすれば旧市街のキャラバンサライは空き家となって、博物館にでも変わってしまうだろう。」という記述があり、要するに旧市街を生きた都市として継続させるには、放置すなわち凍結的保全ではなく、一定の開発による活性化が必要という考えが示されている。番匠谷が作成した旧市街計画は、ヘレニズム時代のグリッド状街路の一部を近代道路として整備する内容であった(図2)。実際、聖書の舞台でもあった「まっすぐな道」が、旧市街を貫通する道路として拡幅整備された。



図2:番匠谷による旧市街計画

1969年、OTCA(後のJICA)は番匠谷作成の都市計画に対応した地区詳細計画の策定を目標とした専門家を派遣し継続的な協力を試みた。1973年の報告書には、単なる近代住宅地ではなく、ダマスカス独自の都市生活様式に対応した地区提案が見られた。また政府間協力とは別に、番匠谷計画にあったティシュリン公園や大統領宮殿が、丹下健三によって設計、実現された。

* [連絡先] 〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1 筑波大学大学院システム情報工学研究科 松原 康介
Tel/Fax:029-853-5086 E-mail: matsub@sk.tsukuba.ac.jp

3. 世界遺産登録と現代の都市保全プロジェクト

都市の急激な成長や物流の近代化といった当時の時代背景の中で考案された番匠谷計画であったが、近代開発特に道路計画に対する批判も少なくなかった。近代都市計画の誕生の背景には、公衆衛生や交通といった19世紀の先進国の都市問題が存在したが、20世紀後半の途上国においては必ずしも同じ価値観では受容されなかったのである。そうした中、ユネスコの専門家ステファノ・ピアンカは1979年の世界遺産への登録と同時に都市計画の刷新を提案したが実現には至らず、番匠谷計画は現在でも法定のダマスカス都市計画である。こうした経緯からJICAによる都市インフラ関連の事業が引き続き実施されてきた。とりわけ、番匠谷計画の更新を狙った開発調査(2006~08)では、地方自治環境省、ダマスカス県庁、ルラル・ダマスカス県庁の三者をカウンターパートとする総合的な調査が実施された。エコシャールや番匠谷といった主導的なエリート計画家がトップダウン的に計画を策定する時代は過去のものであり、調査団は様々な分野の専門家から構成された。結果として、保全分野では複数の歴史地区及び緑地地区の保全再生が提案された。この他、フランスやドイツ、EUなどの国際機関が、一定の連携の下に様々なプロジェクトを実施している。

2009年には後継の技術プロジェクトとして「ダマスカス首都圏都市計画・管理能力プロジェクト」が開始され、ここには文化・歴史建造物保護分野の専門家が加わった。旧市街西南に位置するカナワート南地区を対象に、歴史性を保持しながら地区の活性化と建物の老朽化対策を実現することを目的としている。同地区は16世紀に興隆を見たが世界遺産エリアからも外れており、地区の歴史及び歴史的価値は必ずしも明確ではない。一方、一般的に技術プロジェクトにおいてはカウンターパートとの協働が重要となるが、歴史都市の保全再生分野では、更に住民参加も大切である。そこで、地区内に点在する小規模モスクの観察と住民へのヒアリングから地区の歴史を記述するとともに、建築史分野の方法論である建築ボキャブラリーの収集が試みられている(図3)。これは街路や中庭住宅における空間利用のあり方や、工法、材料に関する語彙や概念を現地用語に基づき吸い上げ再整理することで、歴史的な都市空間のあり方をひとつのモデルとして再現するとともに、実際に住民が街路景観を整備したり、住宅を補修する際の共有のガイドラインとして昇華させることを狙ったものである。



図3: CP・住民との住宅調査風景

4. まとめ

以上、都市作りを巡る、主体の多様化や空間の多文化化、先進国と途上国の相互関係といった論点を、ダマスカスの都市計画史に即して概略した。破壊か凍結保全かの二者択一ではなくそのバランスが重要であること、一般的な近代主義から地域文化の尊重へ、また一人で作る計画から皆で参加する都市づくりへの移行が、大きな方向性と考えられるが、わが国の協力はそこで確固とした実績を残してきたのである。すなわち、国際協力における都市保全の課題は、文化的にも近代化の度合いでも異なる都市をいかに学び理解し、適切な個別解を与えるかにある。現実に住民が生活の場として活用する以上、都市の拡大・縮小の圧力に適宜介入することも必要である。更に、トップダウン型からボトムアップ型への計画体制の変更も重要であり、カウンターパートや住民との協力が一層重要となる。

これらの課題を乗り越えたところに見えてくるのは、先進国による一方的な都市計画の押し付けではなく、お互いに学びあいながらヒューマン・スケールで多様性豊かな都市空間を実現する、国際協力による都市保全の将来像である。都市には様々なアクターが存在する。政府間の協議から技術者同士、一般住民同士による草の根支援まで、様々なレベルで国際交流が進むことによって、先進国・途上国を問わず世界の都市が、それぞれの個性を残しながら多様化していくプロセスが展望できよう。

【参考文献】

奥井正雄・八木幸二『シリア国都市計画専門家総合報告書』海外技術協力事業団, 1973

松原康介「番匠谷堯二の中東・北アフリカ地域における業績について」都市計画論文集, 40-3, pp.163-168, 2008

The study on urban planning for sustainable development Damascus metropolitan area in the Syrian Arab Republic, 4 vols., JICA, 2008